Sarva mangala mangalye ①インドの聖典とプラーナの解説

シュリー・ラーマクリシュナの直弟子たちが、アランバザールの僧院の頃から夕方の祈り（夕拝）の際に歌っていた曲は、初めはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの作った「Khandana-bhava」だけでした。

その後に「Om Hrim ritan」が加わりました。そしてしばらくして「Om Hrim ritan」の最後には“Om sthapakaya cha dharmasya…”が付け加えられました。

☞第41回 勉強会 01月23日　Om Hrim ritan－⑤参照

それからだいぶ後になって、スワーミー・アカンダ―ナンダジから、「タクール（シュリー・ラーマクリシュナ）の賛歌はあるが、母なる神の賛歌がないので、女神の歌も合わせて歌ったらどうか」という意見があり、「Sarva manngala mangalye」が始まりました。

これは、サンスクリット語の賛歌です。

さて、**ヒンドゥー教の聖典**にはどんなものがあるでしょうか？

①ヴェーダ：この中に「ウパニシャッド」があります

②哲学：「サーンキャ哲学」など

③叙事詩：「ラーマーヤナ」「マハーバーラタ」

④プラーナ：「ヴィシュヌ・プラーナ」「バーガヴァタ・プラーナ」など18種類

⑤タントラ

⑥アーガマ・ニガマ

哲学は哲学だけです。

ヴェーダの中には、(1)儀式と(2)神の真理について、があります

叙事詩は、物語ですが真理のことも書いてあります。

叙事詩とプラーナは似ていますが、この２つは何がちがうでしょうか？

◆叙事詩：「ラーマーヤナ」と「マハーバーラタ」の２つだけ。

ヒーロー（主人公、英雄）が神様の化身。

「ラーマーヤナ」のヒーローはラーマ神。

「マハーバーラタ」のヒーローはクリシュナ神。

　　パーンダヴァとカウラヴァが登場しますが、それらは皆人間です。

◆プラーナ：１８ある。ヒーローとヒロイン（女主人公）が登場します。神様と女神。

　　　　　 「バーガヴァタ・プラーナ」の神の化身はシュリー・クリシュナ。

　　　　　　他のプラーナには、ドゥルガー女神、シヴァ神、カーリー女神が出てきます。

　　　　　　プラーナの１つ、「マールカンディーヤ・プラーナ」の中には色々なテーマがあり、１つは、ドゥルガー女神について書かれてあります。

　　　　　　全てプラーナには、５つの特徴があります。

**＜プラーナ（インド神話）について＞**

1. **１８のプラーナとは**

①　ブラフマ・プラーナ  
②　パドマ・プラーナ  
③　ヴィシュヌ・プラーナ  
④　ヴァーユ・プラーナ  
⑤　バーガヴァタ・プラーナ  
⑥　ナーラダ・プラーナ  
⑦　マールカンディーヤ・プラーナ  
⑧　アグニ・プラーナ  
⑨　バヴィシャ・プラーナ  
⑩　ブラフマヴァイヴァルタ・プラーナ  
⑪　リンガ・プラーナ（タマス）  
⑫　ヴァラーハ・プラーナ  
⑬　スカンダ・プラーナ  
⑭　ヴァーマナ・プラーナ  
⑮　クールマ・プラーナ  
⑯　マツヤ・プラーナ  
⑰　ガルダ・プラーナ  
⑱　ブラフマーンダ・プラーナ

1. **全てのプラーナの主な５つの特徴**

①サルガ(sarga)：宇宙の創造　creation

②プラティシャルガ(pratisarga)：創造の中の創造

③ヴァムシャ(vamsa)：Dynasty 系図

　　　　　　　　　　　例えば、ラーマチャンドラのお父さんは誰か？

父親の父親は誰で、どこから来たか？ いつ始まったか？

　　　　　　　　　　　パーンダヴァ、カウラヴァにもあります。

　　　　　　　　　　神の王朝と王様の王朝について書かれてあります。

④マンヴァンタラ(manvantara)：14のマヌ（人間の祖先）が生きている間の色々な話。

⑤ヴァムシャ―ヌチャリタ(vamsanucarita)：インドで有名な２つの王朝（王家の歴史）について。

●太陽神からきた王朝-Solar dynasty

**●**月の神からきた王朝-Luna dynasty

それ以外にも、特徴があります。宇宙世界の維持と破壊、どうやって宇宙を創ったか。

ブリッティ（仕事profession）やブランマン（避難所）についてなど。☞※１参照

またプラーナの中には沢山の物語が入っています。世俗的なもの、哲学、儀式、神様のこと、王様のことなど、物語ですからメインのテーマに関連して色々な話が出てきます。

例えば、王様のことが出てくると、「王様の義務はなんですか？」とそこから話が始まります。

そして、現代の物語にも出来事（事実=Non fiction）と想像（作り事=Fiction）があるように

歴史的なことと、詩人のような想像も混ぜています。

「プラーナ」の編者はヴィヤーサ（聖仙）で、またヴィヤーサは「マハーバーラタ」の作者とも言われています。

「ラーマーヤナ」と「マハーバーラタ」は、ほとんどが歴史的で、想像はありません。

「プラーナ」は想像もあり、歴史的事実もあります。

しかし何が事実で何が想像か調べるのは難しいです。

**「プラーナ」を作った目的はなんでしょうか？**

それは、聖典を作った目的と同じです。

聖典の目的は「真理は何か？ どのように真理を悟るか？」です。

また、どのようにすれば人間がもっと完璧に、純粋になれるか？

そして永遠の存在のことも書いてあります。

聖典の１つの部分が「プラーナ」ですから、その意味では聖典と「プラーナ」は同じです。

どうして哲学だけでは充分ではないのでしょうか。

ヴェーダ、ウパニシャッド、ダルシャナなど、哲学だけで知識は充分です。

そしてそれらの中にも話が一杯あります。

ヴェーダの中には真理の話、説明のほか、「どのように悟るか？」、「悟りの目的と障害は何か？」など書いてあります。

**なぜ叙事詩や「プラーナ」が必要なのですか？**

それは、物語だと皆さんに分かり易いからです。

・**「バガヴァッド・ギーター」**：例(Example)だけで物語はほとんどありません。

Context（文脈）が物語です。

・**「ウパニシャッド」**：「カタ・ウパニシャッド」のように物語はあります。

しかし始めから終わりまで物語ではありません。

哲学の話をする前に「心の準備」のために物語が少し書かれているだけで、後は哲学です。

・**「プラーナ」**：最初から最後まで物語で、物語の中に哲学があります。

始めから終わりまで物語。

あちこちに哲学のことがあり、人生の大事なことが書かれてあります。

「哲学の中に物語があるのか、物語の中に哲学があるのか」では大きな違いがあります。

「プラーナ」で面白いのは、世俗的なことが書いてあることです。

例えば「王様の義務とは何ですか？」－それは哲学的ではないです。

しかし「ラーマーヤナ」や「マハーバーラタ」、「プラーナ」の中にもその問題は書いてあります。

そのように真理のことだけでなく、社会のこと、道徳のことも色々と教えています。道徳的なことは何か、理想的な社会は何か。理想的な父、母、息子、娘、聖者についても書いてあります。

生活についての詳しいことも書いてあります。「プラーナ」の中には、物語は違っても同じアイディアが繰り返し出てきます。

もう１つは、ある神様、ある女神はなぜ素晴らしいのか、その説明もあります。

・**「シヴァ・プラーナ」**：シヴァ神のこと、その性質が中心に書かれてあり、シヴァの信者はそれがとても好きです。

・**「ヴィシュヌ・プラーナ」**：ヴィシュヌ神が中心。ヴィシュヌの信者はそれが好きです。

神様の性質の説明もたくさん書かれてあります。

しかし、そのメインの神様のこと以外に、他の神様・女神のことも書いてあります。

**・「マールカンディーヤ・プラーナ」**：女神が中心で、その１つの部分が、「チャンディ」です。

「チャンディ」は、ドゥルガー女神の１つの名前です。その女神の本性は何か、出来事は何かが書かれています。チャンディは、悪魔を殺して神々と人間を守っています。それがテーマです。

面白いのは、「プラーナ」に出てくる神々、シヴァ、ヴィシュヌ、ドゥルガー、カーリーは、別々の神様で、**姿形は違いますが、みな同じ「神様」の様々な現れなのです。**

しかし、他の宗教の人や外国の人は、「ヒンドゥー教には沢山の神と女神がいる」と誤解していますが、神様は1人、１つだけです。

**その「１つ」とは何ですか？ それはブランマンです。**

それは「神様」とは言わず、「絶対の真理」と言っています。その色々な現れが、神と女神です。そのことを覚えていないと混乱が生じます。

「シヴァ・プラーナ」では、シヴァが宇宙を創造します。

「ヴィシュヌ・プラーナ」では、ヴィシュヌが創造します。

「マールカンディーヤ・プラーナ」では、女神が創造します。

本当は誰が創造しましたか？ しかし、そのこと（ブランマン=同じ存在の色々な現れ）を覚えていれば混乱はしないでしょう。

ドゥルガー、シヴァ、ヴィシュヌには２つの姿があります。

１つは、様々な現れとしての神、ドゥルガー、シヴァ、ヴィシュヌ

もう１つは、「絶対の真理」、すなわちブランマン。

神様の化身も同じです。

同じ神様が、ある時、ある国に化身の姿で現れているのです。

そのことを考えると、イエス、ラーマクリシュナ、ブッダ、チャイタンニャ、クリシュナ、ラーマは違いません。同じ存在が、ある時ある国に現れているのです。そうすれば、混乱も闘いもありません。

**例 ①　同じ一人の人間でも、様々な姿と呼び方がある**

「お父さん」を想像してください。家にいる時はお父さん。会社に行くと「サラリーマン」。

病院に行くと「病人」です。ヨーガを勉強している時は「生徒」、買い物に行くと「お客様」です。車を運転していると「運転手」。同じ人間、「お父さん」の色々な姿で、名前もイメージも別々です。

また「サラリーマン」としての職場での印象は「サラリーマン」だけですが、家にいる時はどんな服を着て何を食べているか、奥さんや息子、娘とどのように話すか、イメージ出来ません。

そして、サラリーマン以外にも様々な姿がありますが、寝ている時は何の姿もありません。

そして死んでしまうと「死人」、全部姿も形もなくなってしまいます。

**例 ②　透明な水でも色を混ぜれば様々な色に変わる**

水の中に様々な色を混ぜると、様々な色が出来ます。青い色素を入れると水は青くなります。

しかしそこにブリーチなどの漂白剤を入れると、色がなくなり、水の本来の透明になります。

ドゥルガー、シヴァ、ヴィシュヌも同じことです。ある時姿が現れていると、性質や形が出ます。出来事、やる事が、その時に別々になります。しかし、皆本性はブランマンです。

そのように、

創造、維持、破壊はブランマンだけが行っていると理解すると混乱はなくなります。

ある宗教には、「神様には別な現れはなく１つの神だけ」という考えがあります。

キリスト教、仏教、神道がそうです。

**どうしてヒンドゥー教には、色々な神の現れがあるのでしょうか？**

それは、皆さんの「好き（好み）」が違うからです。

例えば、「母なる神様（女神）」をイメージすると心が落ち着くので、「神様」より「女神」の方が好きという人もいます。

また、男性の神様の方が好きという人もいます。

ヒンドゥー教には沢山の像や神様がいますので、自分の好みで選ぶことができます。

１つだけでなくてもいいです。

このようにインドには、沢山の神・女神の考えがありますが、イスラム教には絶対ありません。

「神」は男性のイメージだけです。

キリスト教徒の中には、マリア様が好きという人々がいます。ブラジルや南ヨーロッパに多いです。そちらでは、イエスより女性のイメージが好きなので、マリア様はとても人気があります。

（イエスは神の化身ですが、男性のイメージです）

それだけではありません。神様はどうしていつも男性のイメージで、なぜ女性のイメージではないのか？ という意見（Women-revolution-movement）もあります。

ヒンドゥー教の中には女神様がいます。

西洋の信者の中には「シュリー・ラーマクリシュナよりもホーリーマザーの方がもっと好き」という人も結構います。人は自分がより心地よいものを求めるでしょう。

例えば、普通のお母さんとお父さんのことを考えてください。

お父さんについてのイメージは、厳しく怖いなどのイメージが時々あります。

ですから、神様に対して「Father、Father」と言うと、自分のお父さんのイメージが出てきます。

とても心理的なものです。

一方お母さんは、何でも聞いてくれて優しいというイメージがあるので、神様がお母さん（女神）だと気持ちが楽という人もいます。

そのために、ヒンドゥー教では色々な選択肢があります。皆さんはドゥルガー女神が好きですね？

そのことを考えると「チャンディ」です。「プラーナ」には、ドゥルガー女神の物語があります。私（マハーラージ）は毎朝「チャンディ」を読んでいます。ヴェーダーンタ協会の朝のチャンティングの時には、「バガヴァッド・ギーター」の他に、個人的に「チャンディ」を毎日読んでいます。

チャンディの出来事は、いつも悪魔と神の戦いです。

◆悪魔と神の戦いの目的

天国は一番良い場所で、神々が住んでいます。悪魔は、『どうしてあなた達だけがそこに住んでいるのですか。私達もそこに住みたい』と言い、戦いが始まります。時々、神々が負け、天国に悪魔が行きます。悪魔はとても利己的で暴力的です。自分のためにだけ宇宙をコントロールします。

神様は、もちろん自分達のことも考えますが、人間のことも考えます。そこが悪魔と神の違いです。普通の神は、人間や悪魔よりレベルが高いですが欲望もあります。

普通の人間が、瞑想し色々実践し、普通の神になっています。「カタ・ウパニシャッド」のヤマもそうです。死神も同じ。

しかし、「神」と「偉大な神」は違います。

神は悪魔に負けていますから、ある時、偉大な神と女神（シヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマー、ドゥルガー）に祈ります。『守って下さい、助けて下さい、手伝って下さい』と。

（ドゥルガー、カーリー、チャンディは同じ存在）

ある時、神は、ドゥルガーに祈りました。『母なる神様、前に約束しました、私が困っている時に現れて守ってくれると』。その時に、ドゥルガーは現れ、自ら戦い始めました。マザー・ドゥルガーは母なる神ですから、最初は苦戦していましたが最終的には悪魔を殺しました。

こうして普通の神々は天国に戻ることができ、元通りの暮らしを続け、人間のことも守ることができるようになりました。

「何の悪魔をどのように殺すか」という物語は結構あります。

それだけでなく、その中に素晴らしい賛歌もあります。神々はどのようにマザー・ドゥルガーに祈ったか、どのように賛歌を作ったか。

その中の１つが、「Sarva mangala mangalye」です。それには女神の本性についても書かれています。マザー・ドゥルガーの本性は何ですか？それとクリシュナの本性は同じです。

「バガヴァッド・ギーター」と似ています。

「シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター」の第10章、『ヴィブーティ・ヨーガ』の中に、

“宇宙の全ての素晴らしいものは私です”とあります。普通の人間の中では王様、山の中ではヒマラヤ、一番素晴らしいもの良いものはクリシュナです。

「チャンディ」の中に、同じことが書いてあります。全ての美しいものはドゥルガーです。そのことを考えると、「バガヴァッド・ギーター」と「チャンディ」は似ています。

「マールカンディーヤ・プラーナ」の１つの部分が「チャンディ」です。「マールカンディーヤ・プラーナ」の、第11章の10～12節に、「Sarva mangala mangalye」があります。他にも賛歌はありますが、これを選んで、ラーマクリシュナ僧院の夕方の祈りの時の歌になっています。

また「チャンディ」は、「バガヴァッド・ギーター」のように、チャンティングのメロディーが

あり、「Sri-Sri-Chandi」というCDがあります。（ヴェーダーンタ協会販売）

………………………………………………………………………………………………………….

※１. 参考　（インターネット「インド神話」より）

マハープラーナには、以下のような10の特徴があると言われています。  
①　サルガ（最初の創造）  
②　ヴィサルガ（第二の創造）  
③　スティティ（全ての生命体を支える大地）  
④　ポーシャナ（育成）　  
⑤　ヘートゥ（目的）　  
⑥　マンヴァンタラ（マヌの時代）　  
⑦　ヴァムシャ（系譜）　  
⑧　ヴァムシャーヌチャリタ（王家の歴史）　  
⑨　サムスター（崩壊）　  
⑩　アーシュラヤ（庇護所、拠り所）